

## CONTENTS

- 1 ●令和3年度(2021年度)立正大学FD活動を振り返って  
2~6 ●令和2年度(2020年度)ベスト・クラス賞 受賞科目紹介
- 7 ●令和3年度(2021年度)FD活動報告

## 令和3年度(2021年度)立正大学FD活動を振り返って

全学教育推進センター長 吉岡 雅光

令和3年度もコロナウイルスが猛威を振るう中での幕開けとなりました。学生の学園生活をこれ以上損なうわけには行かないことから、感染防止を十分に留意しつつも可能な限り対面授業を取り入れ、教育の質を確保することが求められた1年でありました。

今年度は、各部局・センターが全学的なFD研修会を積極的に企画した結果、以下の6つを実施することができましたので、簡単に紹介させていただきます。まず、5月24日に自己点検・評価委員会主催で「キホンを知る「点検・評価」×「内部質保証」を育む」をテーマに、大学基準協会の蔦美和子氏より大学評価の概要とその活用について講演していただきました。本学では次年度が認証評価年に当たることから、大学および教職員が取り組むべき課題を再確認し理解する良い機会となりました。

2期に入ってから、ほぼ毎月1回のペースで研修会を開催させていただきました。10月6日には、障害学生支援室によって「障害者差別解消法と障害学生支援体制の整備—その奇跡と今後の課題—」が開催され、合理的配慮の法的義務としての取り組みについて数名の方々に講演していただき、支援室運営の課題を共有しました。翌11月12日には、情報環境基盤センターによって「教育のデジタル化を踏まえた学習データの利活用に関する提言—エビデンスに基づく教育に向けて—」が開催され、教育の実践において記録されるプロセスデータを統合・分析し、適切な学生指導を実現しようとする試みを提案していただきました。翌12月18日には、入試センターによって「新学習指導要領と2025年度入試」と題する研修会が開催されました。2025年から新学習指導要領に基づく教育を受けた高校生が大学に入学して来ることになり、本学としても出題範囲や内容を検討する必要がありますので、出題者をはじめすべての教員が認知しておく良い機会となりました。

年が明けて1月21日には、データサイエンスセンターによって「DS授業における公的統計データの利活用について」と題する、公的統計データを大学教育に利用する取り組みについての勉強会が開かれました。データサイエンス学部とデータサイエンスセンターが創設されたことにより実現できた企画とも言えるでしょう。そして最後となりましたが、2月24日には、全学教育推進センターによって「大学教員が気をつけるべき著作権の問題について」と題する研修会が開催されました。コロナ感染対策に限らず大学教育のDX化やデジタルデータの利活用は増大する一方ですので、教員の授業にとって著作権とは何か、保護されるべき著作物とは何かを確認するためにも時宜を得たテーマでした。

いずれもオンラインでの開催となりましたが、それぞれタイムリーなテーマを設定していただき、FD研修として学ぶところが多かったと思います。企画の労を執られた方々、並びにそれぞれの企画に快諾し講演していただきました発表者の方々には、ここで一人一人お名前を挙げずに失礼ではありますが、あらためて御礼申し上げます。

FD活動としてはこの他にも新入生アンケートや授業改善アンケート、自己点検評価入門研修会、さらに、各学部・研究科においては独自のFD研修会等を開催していただき、大学全体として多彩な活動が実現されました。今後とも多彩なFD活動が展開されることを期待しておりますが、FD活動の数が増えると教員個人がすべての活動に参加するのは難しくなる面もあります。FD活動に参加することが義務や至上目的になっては本末転倒ですので、開催する側としては企画数と開催時期のバランスを配慮し、参加する側としてはどれに参加するかを厳選して、授業内容・方法の改善のために役立てるといふ本来の意味を見失わないようにしたいものと思います。

# 令和2年度(2020年度)ベスト・クラス賞 受賞科目紹介 教員インタビュー

〈概要〉

2020年度授業改善アンケート結果より、ベスト・クラス賞を受賞した6名の先生に、授業設計のポイントや工夫をお伺いしました。



## 佐多 芳彦 先生 (文学部教授)

受賞科目名：「日本史概説2」  
(オンデマンド型)

### —佐多先生、この授業の目的や概要をお話いただけますか？

この授業は基本的に1年生が大勢を占めるんです。ですから高等学校の授業で身につけてきた日本史と、大学で「歴史学」として学ぶ日本史の違いを少しでも理解してもらえるようにと考えて行っています。それは学生が2年次以降にゼミナールや専門性の高い授業に触れたときに早く馴染んでほしいとの願いがあるからです。

### —授業のどのような流れで行われたのでしょうか？

具体的には、配布する資料やプレゼンテーションのプリントアウトと、それに動画を組み合わせで行いました。準備する時間も少なかったため、まずは通常の対面授業とほとんど変わらない私のスタイルの講義を行うことに絞りました。コロナ禍の授業という大変な状況で学生が戸惑ってしまわないように、という想いも強くありましたね。オーソドックスですが、わかりやすい配布資料とそれを補う意味でのプレゼンテーションという感じですね。あとは通信環境が十分ではない学生が不利にならないようにプレゼンテーションのプリントアウトも配布しました。不公平感を少しでも払拭できればと考えたからです。

### —授業を構成する上でポイントとしたことや、そのために工夫されたことはありますか？

この授業を構成する上ではプレゼンテーションの内容と配布資料との補完関係を明確にすることが重要だと思っています。また第一義として高等学校までに学んできた日本史の復習ということがあっても考えています。でもそれではわざわざ大学で行う意味はないん

です。なので高等学校の教科書には載っていない、研究の最先端の話を変えながら講義を行うことで新たな知識をちりばめました。あと高等学校までの歴史の授業というのは事象の関連性よりも事項の重要性に基づいて行われます。これはこれで悪くない教え方だと思いますが、時間の流れが分断され、事象・事項の関連性が希薄になってしまいます。ですから歴史事象の関連性や同期に重点を置いて解説することに努めました。それが学生にとって新たな知識や大学で学ぶべき歴史学として受けとめてくれているようなのでとても安堵しています。

### —学生の学修意欲を高める結果になったわけですね。アンケートでの学生のコメントはいかがでしたか？

学生アンケートの反応としては、「資料が理解しやすい」という意見が多かったですね。ただ学生ができるだけメモを取りやすいようにゆっくり無理せず進めてしまうのでなかなかシラバス通りに進まないことは反省点だと思っています。

### —今後の課題や将来の展望についてお聞かせください

反省点は数限りなくありますね。今はより分かりやすい配布資料や一人で読んでもしっかり読み解けるものを作ることができるよう精進しています。プレゼンテーションって画面遷移のタイミングが本当に難しいのですが、もう暗中模索の連続なんです。少しでも学生の心に何かを残せるような授業になればと考えています。それは学生に大学に来てよかったと思ってもらえるような……と言い換えることができるでしょうが、そうした授業を行い続けることが今後の私の目標です。

### —ありがとうございました



## 竹内 聖一 先生 (文学部准教授)

受賞科目名：「哲学概論D」

(資料配布型+オンデマンド型)

### —竹内先生、この授業の目的や概要についてお聞かせください

「哲学概論」という授業の目的は、大学に入って初めて哲学という学問に触れる学生にこの学問のエッセンスを伝えることです。そのため哲学の歴史を紹介するというよりは様々な哲学の問題の中でも私たちが普段の生活で出会う哲学的な問題を取り上げます。そしてそれについていくつかの立場を紹介して学生に自ら考えてもらうことを目指しています。

### —授業の流れはどのように行われたのでしょうか

講義ではその日考えてもらう問題を紹介した上で学生自身にその問題に答えてもらったりしています。そしてその問題に対する哲学者たちの回答をいくつか紹介してそれらに対する学生の評価を尋ねたりしています。

### —授業を構成する上でポイントとしたことや、そのために工夫されたことはありますか？

哲学の議論というのは抽象的になりがちなので、できる限り具体例を挙げるようにしていますね。工夫としては文字資料に加えてスライドを作成して、そこに図やイラストを多く使っています。またそのスライドに音声をつけたものをYouTube動画として視聴できるようにしました。その動画は5分程度のチャプターに分けることによって学生が見返すとき便利になりました。

### —学生にとっては大変わかりやすい方法ですね。学生の反応はいかがでしたか？

哲学の問題に対して具体的なイメージを持たせたという声や、文字資料やスライド、動画と3つのメディアがあることで自分の必要に応じてそれらを組み合わせて受講することができてよという声がありました。

毎回その日の講義に関する自分自身の考えを問う問題を出して、その回答をC-Learningに書き込んでもらうようにしています。そしてその回答は他の学生にも見られるようにしています。オンライン授業はどうしても孤独になりがちなので、他の学生の答えを見られるのは学生にとって大いに励みになったようです。また哲学の問題に対する答えの多様さを実感したとい

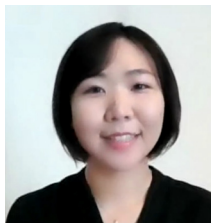
う声もありました。

C-Learningではその日の講義内容に対する質問も募って、その質問に対しては次回の講義までに回答しています。問題に対する学生の回答や質問は資料にまとめて次回の講義で配布しています。こうしたフィードバックも、学生から一定の評価を得たと思います。

### —今後の課題や展望がありましたらお聞かせください

オンライン授業の良いところは受講者がそれぞれの速度で資料や動画に目を通せることや、それらを行きつ戻りつしながらじっくりと考えを巡らせることができることです。また学生も人目を気にせず質問することができますし教員も時間を気にすることなくそれに回答することができます。こうしたオンラインの利点を対面授業の時間制限の中でどの程度実現できるのかをこれから考えてみたいと思っています。

### —ありがとうございました



## 安酸 香織 先生 (文学部非常勤講師)

受賞科目名：「西洋史料講読I」

(同時双方向型/オンデマンド型)

### —安酸先生、この授業の目的や概要についてお聞かせください

この授業の目的は近世ヨーロッパ史の多様な史料を読み解くことによって教科書や概説書では描き切れない歴史像の可能性を知り、歴史研究の多様性と奥深さを理解することです。授業では学生が高校世界史で学んできた大航海時代、宗教改革、三十年戦争、絶対王政、フランス革命について、文書、地図、版画、コインなど複数の史料を用いて多角的に考察しています。

### —授業はどのような流れで行われるのでしょうか

基本的に授業はオンデマンド型で行いました。動画を使用し最初に前回の課題の解説や質問の回答を15分、次に新しいテーマと史料の概要説明を20分行ったあとで、課題として史料読解を30分行います。また動画で史料読解の解説を15分のあと2番目の課題としてフォームの提出を10分かけて行いました。

### —授業構成のポイントや工夫したことをお聞かせください



●異文化の接触  
言葉の通じない者同士がどのようにコミュニケーションを取ったのか？

「身振り手振り」は、異文化間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。言葉が通じない者同士が、どのようにコミュニケーションを取ったのか？

「物々交換」は、異文化間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。言葉が通じない者同士が、どのようにコミュニケーションを取ったのか？

「贈物」は、異文化間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。言葉が通じない者同士が、どのようにコミュニケーションを取ったのか？

「現地住民の拉致」は、異文化間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。言葉が通じない者同士が、どのようにコミュニケーションを取ったのか？

「言葉を覚えようとする意思」は、異文化間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。言葉が通じない者同士が、どのようにコミュニケーションを取ったのか？

「身振り手振り(徳測)」は、異文化間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。言葉が通じない者同士が、どのようにコミュニケーションを取ったのか？

2020年度「西洋史料講読1」第13回  
史料10

18世紀後半フランスのコイン

(1) 1774年のルイ金貨

表の文字：ルイ 16世、神の恩顧により、フランスとナヴァールの国王  
裏の文字：キリストは支配し、勝利し、命令する、1774年

(2) 1792年のルイ金貨

表の文字：ルイ 16世、フランス人たちの国王、1792年  
裏の文字：法の支配、自由第4年

出典  
Christal Bousquet, Monnaies royales de Louis XIII à Louis XVI 1610-1793, Assolène  
1987, 89, 96.

「史料講読の授業では読み取る史料に関する概要を教えていただけのため、より理解が深まりわかりやすかったです。今まで見る事ができなかった史料や日記、当時のチラシなど、史学科だからこそ見ることができ、それを読み取るという新しい授業を体験できたので、史学科に入って良かったなど実感することができました」

### — これからの課題や展望をお聞かせください

学生への課題の難易度やその分量、また時間の面でさまざまな問題がありました。なので学生の反応を見ながら柔軟に調整していくことが今後の課題ですね。あとは学生が抱いた疑問点について解説することにより学生の知的好奇心や理解度は高まったように思いますが、今後はさらに「自ら調べて考え抜く」という大学の学びにつなげる工夫も必要だと考えています。私は試行錯誤の毎日を送る駆け出しの教員ではありますが、初心を忘れることなく着実に経験を積んでいき、より良い授業を展開していきたいと思っています！

### — ありがとうございました

山口 早苗 先生

(経営学部非常勤講師)

受賞科目名：「アジア言語Ⅱ [中国語] A」  
(同時双方向型)

### — 山口先生、この授業の目的や概要についてお聞かせください

この授業は初めて中国語を学ぶ学生のために中国語の初歩的な文法事項や基本語彙を学ぶことにより日常会話や簡単な文章作成など中国語の基礎を身につけることを目的としています。授業は主に教科書を用いて行っています。まずテキストにある文法事項等を講師が解説します。そして受講生にはその場で練習問題を解いてもらいます。こうした授業中の取り組みの他に

授業では各テーマと史料の概要を説明したうえで学生に史料読解を試みてもらいました。そして学生が読み解いた内容や疑問点について解説をしました。このように知識の伝達や実践、フィードバックを組み合わせた授業構成にすることによって史料の読み解き方を段階的に学んだりオンデマンド型であっても双方向のやり取りができたように思います。学生の学修意欲を向上させるために、クラスメートの考えや感想を紹介することやフォームに毎回1つ以上疑問点を記入してもらいました。

### — 学生のコメントはいかがでしたか？

学生からの評価が高かったのは、「教員の熱意や意欲」「教員の話し方」「満足度」「新しい知識や考え方の習得」などの項目でした。

具体的にはこのようなコメントがありました。  
「課題を行った後にしっかり解説が見られるので悩みが解決しやすい、疑問なども次の授業で答えてくれるのでわかりやすい」

「動画内での先生の話し方も聞き取りやすく、作業のポイントもわかりやすく示してくださるので大変勉強になりました」

復習も大切ですので授業後には課題に取り組んでもらい、それを次の授業で確認していくというものです。

### —授業構成のポイントや工夫したことをお聞かせください

今年度の授業は双方向型のオンライン授業でしたのでこれまで取り組んだことのない形態でした。そのため教える側も教えられる側も多く不安を抱えてのスタートになりました。そのなかで特に心掛けたのは学生からの疑問や質問を積極的に募ってそれにできるだけ回答するようにしたことですね。いままで行っていた対面授業のときよりもさらに丁寧なフィードバックにつとめました。また学生の側も積極的に授業に取り組んでくれたのでオンライン授業ではありましたが対面授業とほぼ同等の教育効果が得られたのではないかと考えています。

### —今後の課題や展望をお聞かせください

今後はオンライン授業で活用した Teams や Zoom などのツールを対面授業においても使っていくことで授業に様々なバリエーションを付けることができるのではないかと考えています。またこれからも学生への丁寧なフィードバックを心掛けることで学生のニーズに応じた授業が展開できればと思っています。

### —ありがとうございました



## 岡本 依子 先生 (社会福祉学部教授)

受賞科目名：「保育者論」  
(同時双方向型)

### —岡本先生、この授業の目的や概要についてお聞かせください

この「保育者論」という授業は1年次の保育士資格必修科目で例年40名から60名の履修学生がいます。保育者の社会的役割と倫理や制度的な位置づけを理解した上で、保育職の専門性にもとづく心構えを獲得することを目指しています。また保育者のキャリア形成の道筋だけでなく、感情労働とも言われる保育職のバーンアウトなどについても解説しています。でも実はこれは表向きの目的なんです。本音を言うと私は学生に保育という仕事のおもしろさを伝えることを目指していて学生が自分の目指す保育者像を想像し、創造してもらえたらと願って取り組んできた科目です。この授業では、「専門性とは何か」「保育者の1日」「保護者支援」

「倫理」「保育者の成長」などについて扱っています。

### —授業構成のポイントや工夫されたことをお聞かせください

講義を中心としながらグループワークを積極的に取り入れてきました。そこではただ話し合うだけでなくできるだけ具体的な資料を提示しました。たとえば保育室の環境構成について考えるときは、日本の典型的な保育室と海外の園の保育室の写真を見比べて、講義で解説した環境構成のポイントに照らして検討してもらいました。また保育士の記録について話し合う時は、あえて良くない記録の仮想の例を提示して、何がわからないかや知りたいかを起点として記録の重要性を考えてもらいました。その時に意識していたのはグループワークのコツを学生に提供することでした。具体的な質問のしかたや話の聴き方を例示していたのですが、それで学生たちが少しでも気持ち良くグループワークができたのだったらよかったと思っています。

### —アンケートでの学生の反応はいかがでしたか？

学生からの評価として好評だったのは具体例やエピソードが多いところでした。元々私は授業でも自身の研究でも理論と実践を結びつけることが大事だと考えています。理論だけでも実践だけでも不十分なので、その両方を行き来できる思考が役に立つ知見だと。そう信じてやってきました！ なので学生の前ではその場で思い出したかのように具体例やエピソードを紹介していましたが、実は私はアドリブがまったく効かないんです。学生には見えないところでパワーポイントのノートに準備をしていました。

とは言え、今回ベストクラス賞をいただいたのは学生とパソコンのおかげですね。初めてのオンライン授業で私も試行錯誤で学生には言い訳ばかりしていました。でもそれを学生はよく理解してくれました。

### —今後の課題や展望についてお聞かせください

保育や教育という仕事の重要性はもちろん感じていますが、私の専門は発達心理学なので、まずは人と関わりながら生きていくことのおもしろさや子どもが変わっていくことの不思議さを感じてもらえたらいいなあと思っています。また保育や教育も時代によって変化しますし、心理学も新しい知見がどんどん出てきます。それにちゃんとしていながら学生の柔軟な発想に刺激を受け共に学び続けられたらと思っています。

### —ありがとうございました。

## 佐藤 秀行 先生 (心理学部准教授)

受賞科目名：「心理検査実習B」  
(資料配布型)

### ——佐藤先生、この授業の目的や概要についてお聞かせください

この授業は医療・教育・福祉・産業などの心理臨床の現場で頻繁に使用されている心理検査を受講生自身が実際に体験して検査概要や実施法、解釈法を学ぶことを目的としています。3年次を対象とする選択科目で、国家資格である公認心理師になるための必須科目になっているため学びの動機づけが高い受講生が多い印象を持っています。まず心理検査の概要や実施法、解釈法について資料を用いて説明します。受講生はその内容を踏まえて心理検査を実施して解釈を行いレポートを執筆します。受講していて疑問に思った点などについてはポータルサイトの掲示板を使用して質問できるように設定してそれを受講生同士でシェアできるようにしていました。

### ——授業構成のポイントや工夫したことをお聞かせください

私が資料配布型の授業を選んだ理由はスマホと心理検査と筆記用具があれば受講できるという利点からです。2020年度の第1期は学生も教員もオンライン授業に慣れていなかったことや学生の通信機器や環境についても十分な情報がなかったことから最も安全で落ち着いて受講できる方法ということで選択しました。

### ——特に工夫したところはありますか？

少しでも対面授業に近づけるために口頭で解説していた内容を資料に加え「です・ます調」で表現しました。それにスマホでの受講を念頭に置いてパワーポイントの色彩やフォントサイズなどのデザインを一新してとにかくわかりやすい資料になるよう工夫をしました。また資料配布型の授業の場合には1人で学ぶことになると思ったので事例や見本などを複数提示するなどわかりやすさにつなげる以外にも多様性についても考えてもらえるように意識して資料を作成していました。その他にもスマホで受講しているということなのでハイパーリンクなどを活用してもっと深く学習したい受講生向けの動画や推薦図書などを紹介したりもしました。

### ——学生にはとてもありがたい対応ですね

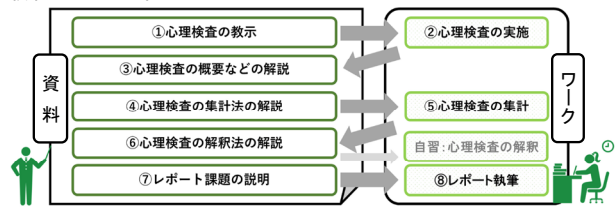
「この授業で新しい知識や考え方が得られましたか」という質問への得点が高かったことがベストクラス賞を受賞した理由とかかかっていますが、これらの取り組みが学生に伝わったためだと考えています。

### ——今後の課題や展望についてお聞かせください

## 授業の概要

・授業内容：心理臨床の現場（医療・教育・産業等）で頻繁に使用されている心理検査を受講生自身が実際に体験し、検査手順・実施方法・解釈を学びます

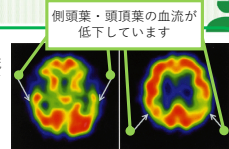
・授業の進め方の基本：



## 神経心理学検査の対象

右図はアルツハイマー病患者の脳血流画像（SPECT）です。赤に比べて黄色や緑、青になっているところは血流の低下を表しています。側頭葉や頭頂葉の血流低下は、アルツハイマー病の特徴ですが、SPECTで異常がなくても認知症を否定することはできません。

出典：国立循環器病研究センター循環器病情報サービス  
<http://www.ncvc.go.jp/cvdi/info/pamphlet/brain/pamph68.html>



国立循環器病研究センター循環器病情報サービスのホームページへ遷移

・言語障害

大脳の一定部位の損傷によって話したり、話を聞いて理解することや、読んで理解すること、字を書くなどの言語要素を含むもののうち1つ以上が障害された状態のことです。ウエルニッケ失語、ブローカ失語が有名です

※失語症の動画：やさしい神経学③ 失語症-ブローカ失語とウエルニッケ失語  
出典：三輪書店 [https://www.youtube.com/watch?v=0SQxwLYS\\_s](https://www.youtube.com/watch?v=0SQxwLYS_s)

資料配布型の一番の課題は資料の作成時間です。これまでの授業の3倍くらいの時間がかかりました。ただ一度作成すればその後は修正しながら使用できるという利点や反転学習への活用など長期的にみた場合のメリットも大きいと考えています。あとは学生とのコミュニケーションがどうしても不活発になってしまったことが反省点ですね。その点はリアクションペーパーなどの活用やレポートのフィードバックが簡単にできるシステムの利用などの工夫が必要になってくるかもしれません。2022年度からは対面授業が主流になるでしょうから、2020年度に得た知識と経験を糧にさらに発展できるように授業実践を行っていきたいと思います。

### ——ありがとうございました



# 令和3年度(2021年度)FD活動報告

## 〈主なFD活動内容〉

5月	新入生アンケート実施
5月24日	FD・SDセミナー「キホンを知る!『大学評価×内部質保証』を育む」 (自己点検・評価委員会主催)開催
7月5日～7月17日	授業改善アンケート(1期)実施
8月6日	「自己点検・評価入門研修会」(自己点検・評価委員会主催)開催
10月6日	「障害学生支援に関するFD研修会」(障害学生支援協議会主催)開催
11月12日	研究会「教育のデジタル化を踏まえた学習データの利活用に関する提言」 (情報環境基盤センター主催)開催
12月6日～22日	授業改善アンケート(2期)実施
12月18日	FD研修会「新学習指導要領と2025年度入試」(入試センター主催)開催
1月21日	FD勉強会「DS授業における公的統計データの利活用」 (データサイエンスセンター主催)開催
2月7日	FD委員会開催 ※学部・大学院合同開催
2月24日	全学FD研修会「大学教員が気をつけるべき著作権の問題について」 (全学教育推進センター主催)開催

## FD研修会

令和3年度は、デジタル化や高等教育における制度変化等の今日的課題を扱うものや、障害学生支援や著作権の問題といった教育活動に深く関わるもの等、さまざまなテーマでの研修会が開催されました。実施方法についても、コロナ禍に見舞われた令和2年度以降、Zoomを用いたリアルタイム配信という新たな方式が導入されていますが、今年度はさらに当日の様子を録画したものをオンデマンド型で配信する方法も取り組まれたことから、各教職員の希望に合わせた受講が可能となりました。



## 全学教育推進センター主催全学FD研修

日時：令和4年2月24日(木) 12:50～14:20

開催方法：Zoomによるリアルタイム配信

参加者：69名(教員59名、職員10名)

〈研修会プログラム〉

1. 講演「大学教員が気をつけるべき著作権の問題について」田中敦弁護士(大阪弁護士会)

2. 質疑応答

〈研修概要〉

平成30年の改正著作権法により「授業目的公衆送信補償金制度」が施行され、著作権への理解が改めて求められる中、本研修会では、講師の田中弁護士より、著作権に関する基本的な事項と共に、「講義における著作物の利用」「講義以外の活動における著作物の利用」について、具体的な事例・反例を交えた解説をいただきました。関心の高いテーマであることから、参加した教職員からも次々に質問が出されましたが、田中弁護士から丁寧なご回答をいただき、大変充実した研修となりました。